いのちへの敬い

鷲尾純一
浄土真宗本願寺派託念寺住職
財団法人心耕会前川保育園副園長

僧侶への転身

筑波大学在職中は心身障害学系に所属し、聴覚障害学を専門として、研究と教育に携わっていた。2年前に大学の職を辞して故郷に戻り、住職と寺院併設の保育園の仕事を始めた。故郷とは、中越地震で一躍有名になった長岡市である。地震の被害は少なくなかったが、辛いことを家族で地域で共有できたことは得難い経験であった。

私の転職は人生設計の想定内であったが、仕事の中身までは容易に想定できることではなかったので、今は失敗を繰り返しながら、それでも徐々にやりがいが感じられるようになってきている。住職の仕事と保育園での子育て支援は、ともに人間学という広い範疇を設定すると、心身障害学ともつながっていて、これまでの延長線上にあるとも言える。

寺院と僧侶の移り変わり

寺や僧侶は何のために存在しているのか。いつまで遡ればいいのか分からないが、「昔」は、地域の拠り所であった。寺の行事が村の行事になっていた。ほとんどの家に仏壇があって、仏壇には毎朝お仏飯があげられ、家の誰かがお経を読んだり、手を合わせたりし、食事のときには揃って手を合わせて「いただきます」「ごちそうさま」とする風景があった。葬式や法事などの仏事は近所の人が集まって手伝い、協力して儀式を行った。宗派が異なると細かな作法やしきたりは違ったのであろうが、仏壇と仏事はおろそかにできないものという共通の認識があったのではないだろうか。それは、私どものような田舎では、昭和40年代から始まった高度成長期の前まではかなりしっかりと続いていたように思われる。僧侶はただ儀式の司祭をするだけでなく、現世での人の生き方を説いた。寺院と僧侶は地域

の人々のこころの拠り所にもなっていた。

ところが高度成長は生活の様式を急速に変えた。いま私の手元に「日本の子ども 60年」という写真集（新潮社刊2005年）がある。終戦からこの方60年の変化を、有名写真家たちが残した子どもたち若者たちの写真を厳選して並べて見せている。ずいぶん急激に街の景色、村の風景が変わったなという思いがする。こんな急激な変化の中に私が暮らしてきたのだと改めて気づかされる。写真に見える都会化、清潔化、便利さ、快適さ、スピード化、物質的豊かさなどの変化と共に、前述した習俗や行動様式は、あるものは消え、また、あるものはどんどん簡略化されてきている。そしてそのことが人の心の有り様もまた変えてきたように思われる。

手を合わせる生活

手を合わせる生活も消えかかっているように思われる。

筑波大学の職員に「お仏壇に手を合わせることはありますか」と尋ねたらどう答えてくれるであろうか。学生に尋ねてみたらどうだろう。こんな問いかけは日本ではタブーであるからできないが、仮にできても、家には仏壇がないと答える人が多いのではないかと推測する。もう少し身近なことに例をとって、「食事をするときに『いただきます』『ごちそうさま』と言いますか？」「そのときに手を合わせますか？」この質問なら答えやすいと思われる。「家の中で家族が揃っているときにはするが、外食のときにはしない」「声に出して挨拶（いただきます、ごちそうさま）はするが、手は合わせない」「子どもの頃はしていたが、気がついてみると最近はほとんどしていない」等々。さまざまな答えが返ってきそうである。私はテレビドラマを見ていても食事場面が出てくると、この点に注目して見てしまう。私の印象ではドラマの中の食事場面は現実よりも手を合わせ、食事の挨拶をしているように思われる。このような場面で番組制作者は役者にどう振る舞わせようかと、少なからず考えているに違いない。彼らの多くは日本の誇れる文化として「食事の際の合掌・挨拶」を捉えているのであろう。私は子どもの頃からずっと、この行為を心がけてきた。筑波大学在職中に公立小学校に招かれて給食をご馳走になるときなど、同席の先生方が私の姿に同調して一緒にやってくださることが多かった。

ドラマの例にしても、私の経験例にしても、「合掌・挨拶」は本来それほど違和感がない行儀として日本人の中に今もあるのではないかと思う。そして合掌の意味を、生き物のいのちをいただいて食を恵まれたことへの感謝、と捉えているひともかなり高

い割合でいるのではないだろうか。なのにこのような誇れる我が国の文化の一つが、私たちの日常からは消えようとしている。「手を合わせる生活の実践」を取り戻したい。僧侶としての私の願いである。

いのちへの敬い

文部科学省は、「教育改革のための重点行動計画」（平成18年1月）の中で＜家庭・地域の教育力の向上＞をあげ、「早寝早起き朝ごはん」運動の全国展開を打ち出した。家庭での教育力を高めるために、先ず「朝ご飯をしっかり食べよう、家族一緒に食べよう」と、具体的な提案を行っている。文部科学省がこのようなことまでも言わなければならないくらい、子どもたちの基本的な生活習慣が崩れてきているのであろう。ご飯を一緒に食べることで親子が会話をする。この機会に「いのちへの敬い」を子どもに伝えたい。伝えて欲しい。私どもの園で子どもたちは「食べ物のいのちをもらって、有り難うございました。ごちそうさまでした」と食後の挨拶をしている。自分が生かされていることに感謝する行為が手を合わせることだと自然に気づいていくであろう。

いのちの重さ

現代の社会は一方で、避けようがないくらいに経済中心主義になっている。また人間中心主義になっている。環境問題で動物や植物を取り上げていても、人間を中心に置いてしか考えない世界になっている。

保育園の子どもたちに話す仏教説話「いのちの重さ」を紹介しよう；

心の優しい王様と小鳥が庭で朝のあいさつをしているところへ大きな鷲が舞い降りてきました。そして小鳥を襲おうとしたので王様は小鳥をかくまいました。鷲は王様に小鳥を自分に手渡すように要求します。王様は小鳥のいのちを守ろうとその要求を拒みます。鷲は自分には生まれたばかりのヒナがいて小鳥を持って帰らないと生きていくことができないと言います。王様は考えた末に自分のモモの肉を刀で切って差し出します。ところが鷲は天秤を持ってこさせ、小鳥の重さと比べます。小鳥の方が重いのです。王様はさらに自分の肉を差し出すのですが、天秤の傾きは変わりません。そのとき王様はハッと気がつき、静かに天秤ばかりにのりました。天秤はしばらく揺れていましたが、やがてぴたっと釣り合って止まりました・・・。

人間のいのちについてだけ「それぞれの尊さ」や「分け隔てのない尊さ」を訴えても説得力はない。動植物につながるいのちへの敬いを認識してはじめて人のいのちへの敬いの心が育つのではないだろうか。

私の地域では幸い寺参りが継続されている。日曜日の朝に地域の方々が寺に集う。一緒に読経をし、法座を開く。手を合わせる生活の輪が子や孫へと伝わっていく拠り所として、寺院が役割を果たせたらと願っている。まずは食事の挨拶と合掌、実践してみませんか。

（わしお　じゅんいち／人間学・僧侶）